

はじめに

この講義では、近代日本の文学資料について、「手稿」、「逐次刊行物」、「刊本」の順に、主として文学研究の観点で、文献的知識を説明する。近代の激動する出版環境と情報環境のなかで、書物は江戸時代以前の形や流通方法と、近代以降のさまざまな出版・流通形態が折り重なりながら出現し、残存するようになる。文学者たちのなかにも、芸術理論の学習や文体の彫琢といった「文学のつくりかた」だけでなく、自分の書いたものを発表し残してゆく方法、すなわち「文学の残りかた」に心をくぼるものがあらわれた。明治から大正期にかけて長く出版されつづけた森鷗外（1862～1922）の『舞姫』（掲載雑誌「国民之友」、収録単行本『第五国民小説』、のち『水沫集』）を取りあげつつ、「近代本」の様相を一覧することとしたい。なお使用する画像は、特記なきかぎりは家蔵本である。

一、手稿

文学者はまず筆やペンで原稿用紙に作品を書く。日本ではワード・プロセッサの登場まで、おおむねこの習慣は変わらない。現在の近代文学研究では、いわゆる下書き段階にあたるものを一括して「草稿」、編集者（印刷所）による本文の割付指定までがなされ、印刷用に提出されるものを「原稿」と呼ぶ。ここからは、文章がどのような環境で書かれたのか（用紙購入元、用筆など）、原構想とその推移（推敲）、二の初出本文との異同等、多くの情報が得られる。

■手稿資料を扱うにあたって採集すべき情報は次の通り。

○形態情報

- ・筆記具の別…墨筆／ペン／鉛筆の別、色
- ・用紙…サイズ、紙／帖の別、罫／無罫の別、罫紙の場合は字数、原稿用紙作成者の情報（「山田製」「相馬屋製」「漱石山房」「春陽堂用箋」など）、枚数
- ・残存形態…帙入／合冊／屏装／軸装／額装など

○来歴の情報

- ・旧蔵者情報、購入日、購入元（※公開可能な範囲で）

○本文情報

- ・推敲…抹消／挿入、欄外・裏面のメモ
- ・平仮名／片仮名の別、かなづかいの新／旧、漢字の新／旧

■採録情報について

当該作品に焦点を当てて研究する場合は、可能なかぎりこまかく推敲を確認する必要がある。原稿用紙を切り貼りした推敲もある。書誌情報を取る場合は、推敲の多寡を備考欄に記入すること（「ほぼ枚ページ」／「数箇所推敲あり」など）が望ましい。

来歴（誰がどこで資料を持ち伝えたのか）の情報は資料の正当な評価につながる。ただしプライヴァシーに関わる場合もあるので注意。

明治時代の文献では、「漢字かな交じり」「漢字カナ交じり」の別が、文章の公共性とかかわることがわかっている。官報などを多く載せる「大新聞」は漢字カナ交じり文で書かれ、町のゴシップなども載せる「小新聞」は多く漢字かな交じり文で書かれるように、明治期にはカタカナの方が公共性が高く、記録や政治的文章にふさわしいものとされた。

第二次世界大戦後、文部省の「訓示」以降の新聞や雑誌は次第に新かなづかいに移行する。ただし多くの書き手はかなづかいの新旧や漢字の新旧を自分で選択した。近年では、自分の文章のスタイルにあわせて漢字とかなづかいの新／旧を選んだ作家が少なからずいたこともわかってきた。永井荷風（1959年没）や谷崎潤一郎（1965年没）は亡くなるまで旧かなづかいを使いつづけるのに対し、武者小路実篤（1976年没）は1959年には新かなづかいに移行する。若い世代の文章では、作家が旧かなづかいで書いているのに雑誌新聞では新かなづかいに直す例や、逆に新かなづかいの文章が旧かなづかいに直される場合もある。書き手の意識とメディアの方針の齟齬もわかるので、原稿一枚目にかなづかいの指定がある場合は注記することが望ましい。

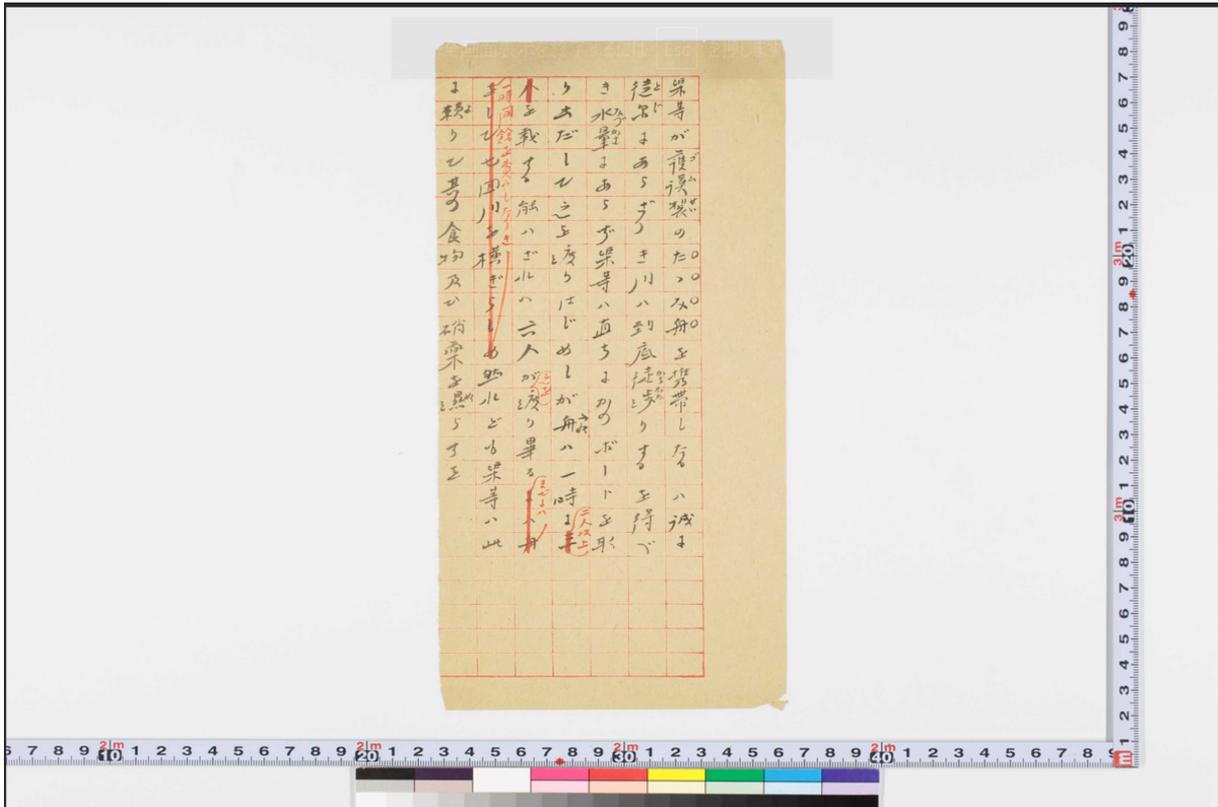
■国文研「国書データベース」での自筆資料公開

国文学研究資料館「国書データベース」では、近年の「日本近代文学における自筆文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」の一環として、全国各地の文学館や図書館が所蔵する手稿資料の画像公開を行っている。

現在、かごしま近代文学館・メルヘン館所蔵「島尾敏雄特別資料」（計 1,952 枚）、岡山県・笠岡市教育委員会管理「森田思軒自筆資料」（計 1,009 枚）、中原中也記念館所蔵「中原中也自筆資料」（計 2,317 枚）、調布市立武者小路実篤記念館所蔵「武者小路実篤自筆資料」（計 3,838 枚）、福岡市総合図書館（福岡市文学館）所蔵「上野英信自筆資料」（計 2,146 枚）を公開中。撮影公開は複数機関と継続中で、当館所蔵資料の公開も予定しており、今年度中には国内最大の自筆資料データベースに成長する予定である（現在の採録情報は基本的に各協力機関の方針に基づいているが、将来的には統一的な採録基準を考える必要がある）。

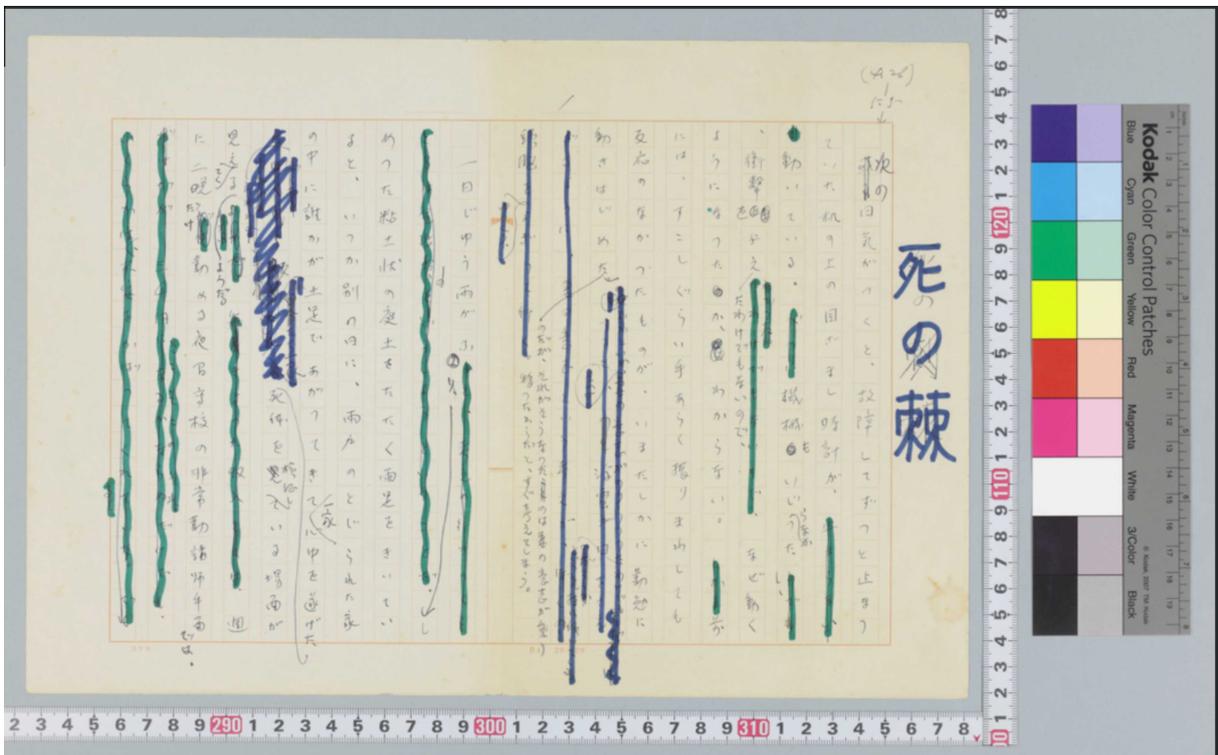
今後は「国書データベース」を使って、各作家の自筆資料を横断的に、かつ時系列に沿って分析することも可能になる。

【図】森田思軒『十五少年』訳稿。同じ文章を何度も訳し直したことがわかる



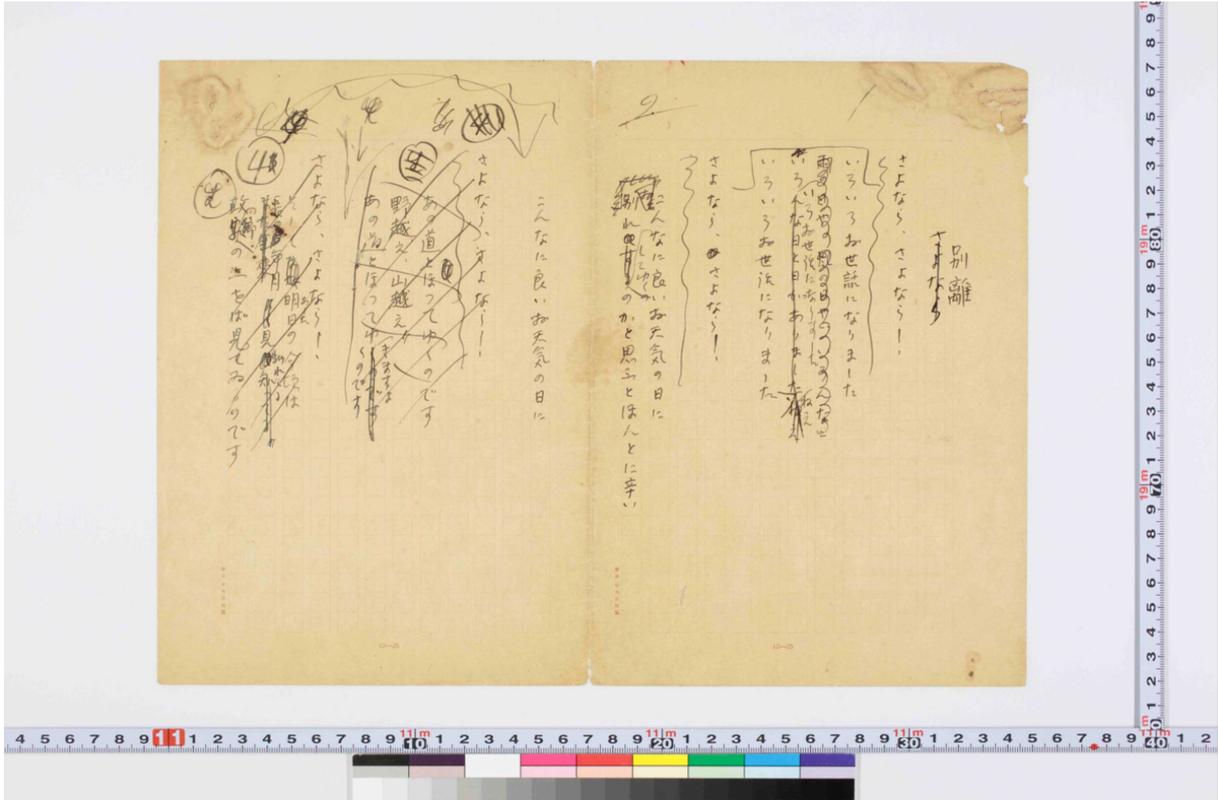
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300013357/1?ln=ja>

【図】島尾敏雄『死の棘』草稿。おびただしい訂正のあとがある



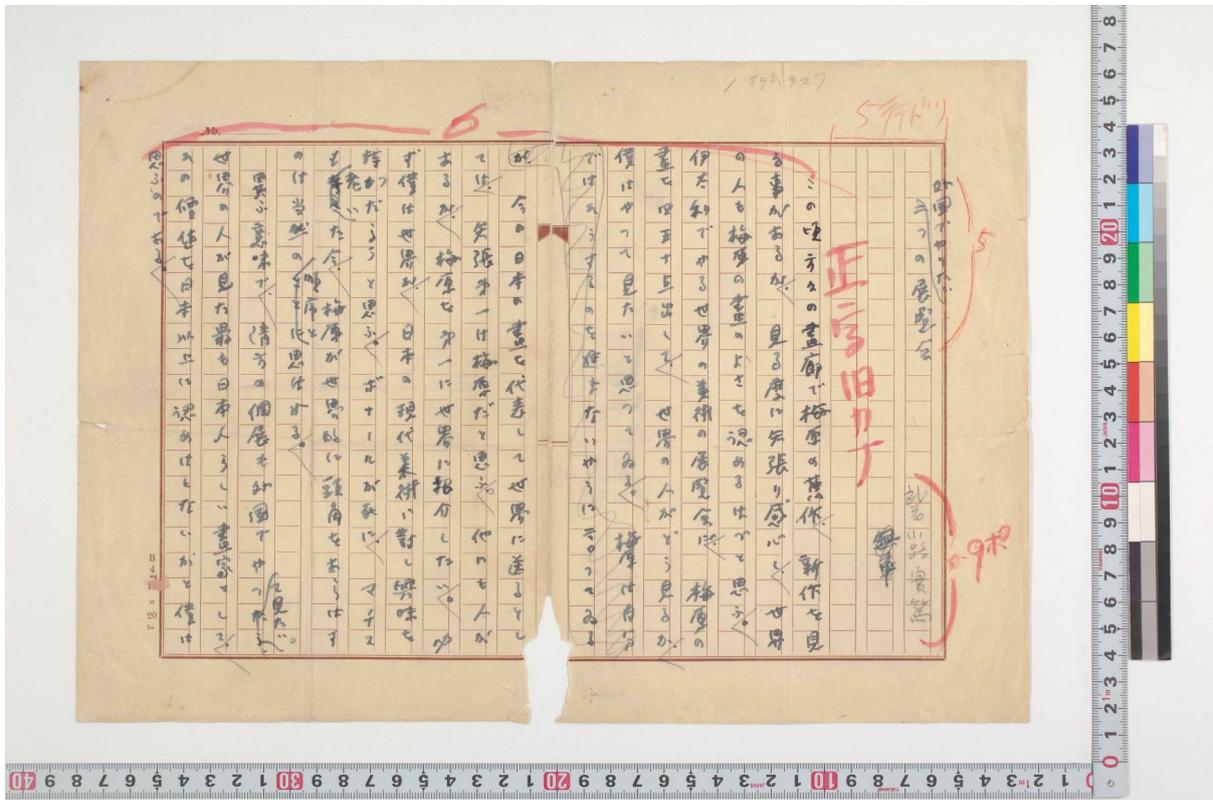
<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300018567/1?ln=ja>

【図】 中原中也『別離』草稿。生前未発表。どう「翻字」するか悩ましい例。



<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300020592/1?ln=ja>

【図】 武者小路実篤実篤「外国でやりたい2つの展覧会」。「正字旧カナ」と指定あり



<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300047662/1?ln=ja>

★「肉筆」の「価値」

草稿段階における作品構想の変化をあつかう「生成研究」というアプローチが紹介されたこともあいまって、近年では手稿に研究面で大きな価値が見いだされている。

戦前に発行された自筆物の目録類を見るに、小説よりも詩歌の方が圧倒的に売価が高い。同時代のジャンル認識の問題のほか、短い詩歌の自筆物は、古典詩歌における短冊や半切に近い意味あいを持ったこととも関係するだろう。永井荷風『船と車』原稿（平成 21 年、東京・古書会館の荷風展示にて展示された）や谷崎潤一郎『盲目物語』の削除された前書き原稿のように、小説の原稿を屏風などに仕立てることも行われてはいるが、表装して飾ることを目的とするならば小説よりも詩歌（あるいは詩人・歌人・俳人の文）、それも原稿用紙よりは短冊が珍重されたことは想像にかたくない。

小説の草稿・原稿が価値を高めてゆくのは大正後期以降であり、夏目漱石の遺墨展覧会などをターニング・ポイントの一つに数えることができる。一方で原稿は文学が活字世界にはばたく以前の反古にすぎないという言及も多くあり、原稿を過度に貴重品扱いすることを戒めるこうした言説には、近代人による近代世界の捉えかたの一端を窺うことができるだろう。

★草稿に残された推敲過程について

草稿・原稿のうち、とくに草稿は、「作品生成過程における一段階」であることに留意する必要がある。上に掲げた『舞姫』の草稿を見ても、これが書かれた唯一の「草稿」であると考えるのは難しいだろう。多くの場合残存しているのは、構想メモ、下書き、本格的に取り組んだ草稿、はじめから書き直した改稿、決定稿、手控え用の浄写稿、などなどのうち一種類のみである。

したがって決定稿というべき原稿では、作家がもっとも書きあぐんだ箇所には抹消や挿入のあとが何も残っていないという場合もありうる。かつて翻刻に関わった芥川龍之介『開化の殺人』の場合、原稿のほかにも数種の草稿がすでに報告されている（「開化の殺人」草稿）（『芥川龍之介全集 第 21 卷 初期文章・草稿』岩波書店、1997 など）。また古書市に当該作品の下書き一括が数度出品されている。芥川が苦闘している箇所はそれぞれに違う。完成原稿の訂正でさえ、その後の校正ゲラで再度訂正が行われていることを念頭において見る必要がある。

小問 1

国文学研究資料館「国書データベース」で「森田思軒」「中原中也」「島尾敏雄」と検索し、手稿から一つ選んで、「採録が望ましい情報」を参考にしながら採録してみてください。（「検索対象」を「書誌」に合わせてから検索してください）

<https://kokusho.nijl.ac.jp/>

二、逐次刊行物（新聞・雑誌）

近代文学の多くの作品は、はじめ雑誌や新聞で活字になり、その後単行本に収録される。ほとんどの作品は活字になった段階ではじめて多くの読者の目に触れ、月評などの批評にとりあげられるのも多くはこの段階の本文である。最初に活字化した本文を「初出本文」という。

★逐次刊行物を扱うにあたって採集すべき情報は次の通り。

○形態

- ・サイズ、外装の有無、検閲による切り取りの有無
- ・残存形態…合本など（後述）

○奥付情報

- ・発行年月日、号数、発行頻度、出版社（者）、印刷社（者）
- ・単価、合本価格、地方価格、郵料

○目次情報

○所蔵者の情報

- ・蔵書印、記名、購求年月日など

○本文情報

- ・他の本文との異同の有無
- ・口絵・挿絵の有無、画工名

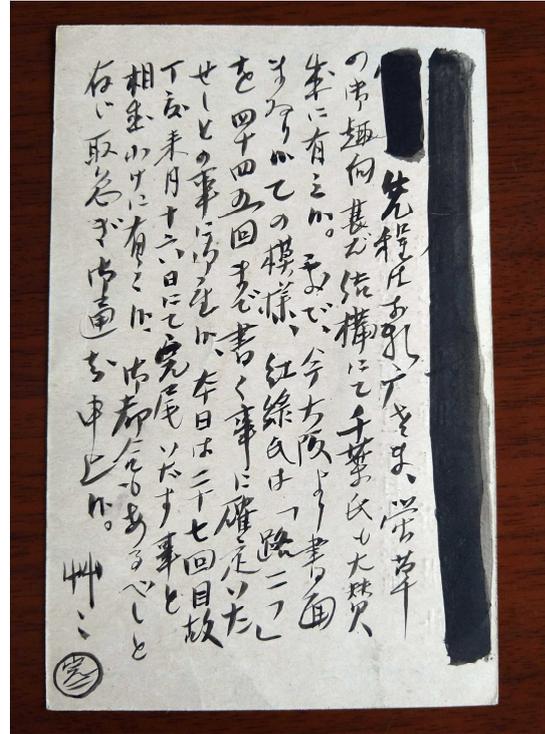
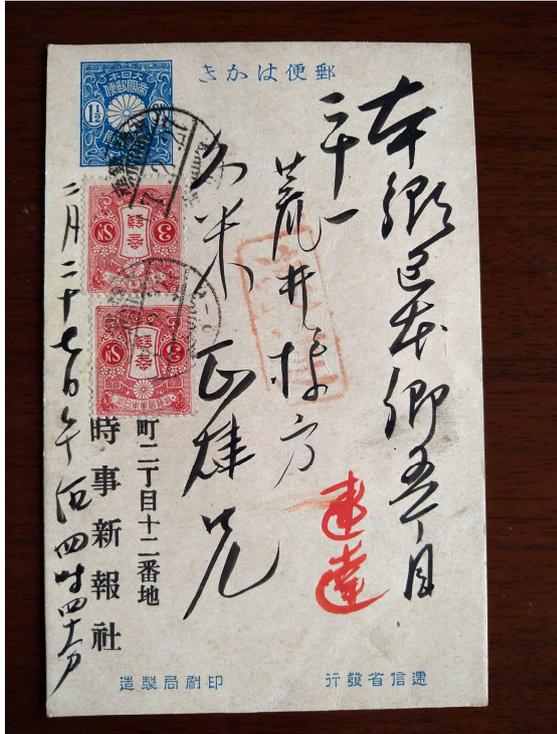
※単行本本文にはない挿絵が雑誌・新聞にのみ載る場合、あるいは単行本と雑誌・新聞で画工が異なる場合も多い。

- ・書き入れの有無

『舞姫』は「国民之友」明治23年1月3日号の「藻塩草」欄に掲載された。「国民之友」は月二回の刊行。民友社は徳富蘇峰を中心とする出版社。蘇峰などの清新な論説と、外国文学を含む多様な情報が「国民之友」の特徴である。蘇峰は「普通」という言葉を繰り返しかえし使うが、これは必ずしも国民の平準化をうたう語ではなく、これまで新しい文章に触れる機会の少なかった日本の各地、各階層の男性読者たち（「田舎紳士」「新日本之青年」と呼ばれる）がそれぞれに新しい思想に目ざめてゆくことを構想した言葉である。『舞姫』が「都の花」などの文学雑誌ではなく「国民之友」に載ったことの意味は見落としがたい。

★原稿料、出版社・新聞社との「相談」

文学者は出版社や新聞社に呈示された原稿料などの条件を受け入れ、あるいは交渉しながら原稿を書く。稿料については一枚ごと・一回ごとの計算を厳密に行う場合、単行本化・劇化・映画化などなどを予定した稿料をまとめて授受（前借り）する場合など、さまざまなパターンがある。また、とくに新聞小説の場合などは、作品の内容に関する情報は作家、挿絵画家、新聞社の記者、部長などに共有され、相談の上で執筆が進められることも多い。次はその一例。



【資

料】大正7年2月27日付、久米正雄宛邦枝完二書簡

■はがきオモテ

本郷区本郷五丁目／二十一日／荒井様方／久米正雄兄／ [切手貼付のため読めず] 町二丁目十二番地／時事新報社／二月二十七日午後四時四十分

※朱筆「速達」。

[印] 速達

[消印1] 京橋銀座／7. 2. 27／后＝一＝

[消印2] 京橋＝／7. 2. 27／后＝一＝

■はがきウラ

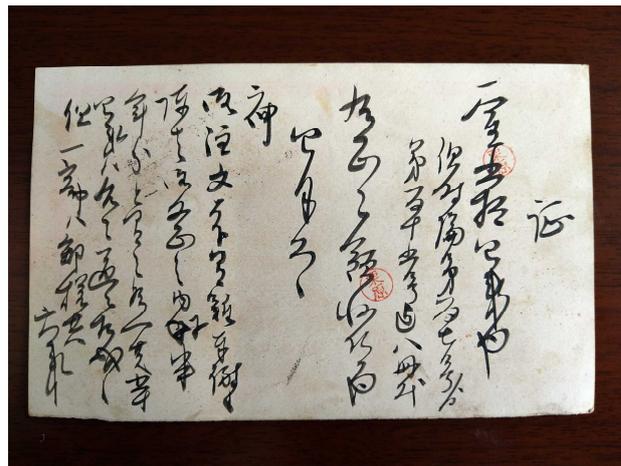
[抹消一行] / [抹消三字程度] 先程はお邪魔さま、虫草の御趣向甚だ結構にて千葉氏も大賛成に有之候。処で、今大阪より書面／まゐり候ての模様、紅緑氏は「路二つ」／を四十四回まで書く事に確定いたし、せしとの事に御座候、本日は二十七回目故／丁度来月十六日にて完尾いたす事と／相成わけに有之候、御都合もあるべしと／存じ取急ぎ御通知申上候。草々 完二

九条武子は歌人、京都女子大学創設者。歌集『金鈴』『無憂華』はいずれも大正期におけるベストセラーであると言われる。徳富蘇峰が経営した国民新聞社の社屋は、一度関東大震災で焼失し、1926年に加賀町に移った。右の書簡は、武子が新聞掲載のためにあらかじめ送った歌が掲載欄に収まりきらなかったこと、国民新聞社が掲載された歌の分の稿料を武子の留守宅に送り、載りきらなかった分の歌についても稿料を渡すかどうか武子に問いあわせたこと、そして武子が掲載されなかった歌の稿料を断ったことを示す。

★雑誌・新聞の流通形態と情報価値

新聞・雑誌の流通は、鉄道輸送と小売店販売によって拡大したと言われる（『日本雑誌協会史』第二巻、1968、『新聞販売百年史』1969など）。ただし特に明治期の雑誌・新聞では、出版社に一定の量を注文して直接取りよせる、通信販売も少なからず行われた。したがって雑誌が月・週・日ごとの「新しい」情報で、単行本が比較的「古い」情報であるという比較は必ずしも成り立たない場合がある。次はその一例。

【資料】明治21年4月2日付、山形県西田川郡加茂村佐藤孝治郎宛、開発社会計掛書簡



■はがきオモテ

山形県西田川郡加茂村／佐藤孝治郎殿

[印] 東京下谷区練堀町十四番地 開発社会計掛

[消印1] 東京・二一・四・二・＝／下谷

[消印2] 羽前・西田＝・四・五／加茂

■はがきウラ

証／一金五十四銭也／但時論第七号ヨリ／第百十五号迄八冊本／右正ニ領収仕候也／四月二日／二伸／御注文被下有難奉謝候／陳者御注文之内 [抹消：＝] 二半／年分と有之候へ共五十／四銭ハ右之通と相成候／但一部ハ郵税共六銭

※「国民之友」明治20・11・18、第12号に挟み込まれていたはがき。はがきウラ本文中、「金五拾円」と「領収仕」の箇所、印「栗原」を捺す。

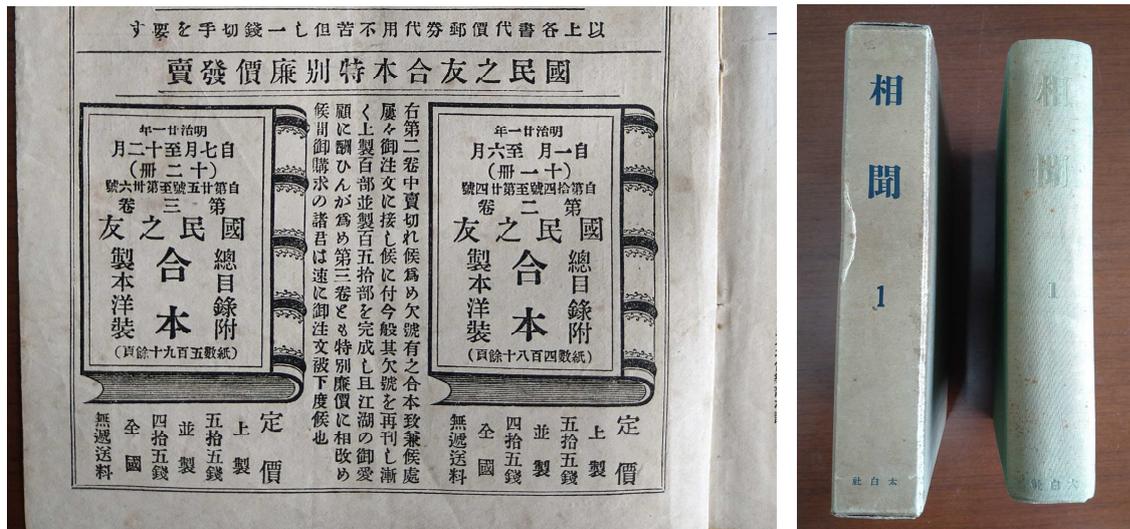
「開発社」は明治大正期に教育書を多く出版した版元。佐藤孝治郎の名前は『加茂港史』（昭和 41、加茂郷土史編纂委員会）に見える。加茂村近くの山形県鶴岡市に鉄道が開通するのは大正 8 年、翌 9 年 1 月には加茂臨港軽便鉄道の敷設請願が出る。雑誌の注文買いは現在まで長く続いているが、鉄道のない（とくに水上交通が中心であった）地域では、こうした通信販売が力を発揮した可能性がある。古書店などで数号を一括販売されている新聞・雑誌に「帯封」がつく例もあり、現・鹿児島県南大隅町に残る「根占書籍館」のように、単行本に関しては新刊書をいち早く購求し、新聞雑誌は在京の支援者に時折送ってもらう、といった図書館（多くは有志による私設図書館）も明治中期までは存在した。

特定のテーマに関する複数の論説が載り、諸家の文芸が載る雑誌というメディアには、いわば情報のダムとしての役割がある。月おくれの雑誌を売る「雑誌屋」が明治大正期の小説に多く登場する一事を考えても、雑誌に「最新」の情報を求める読者が圧倒的多数であったかどうか、まだ疑問の余地は残るかと思う。

★雑誌の残存形態

雑誌・新聞は一点ごとの販売を基本とするが、版元が合本して販売する場合もある。

・「国民之友」の「合本特別廉価発売」広告（明治 22・7・22 日号）と、「相聞」第一輯（版元の太白社による合本）



また、一定以上の冊数を購入した読者は、しばしば雑誌を合本する。



・「明治大家論集」第2巻（2号～）・第3巻合本（「東京市赤坂区赤坂 林武」旧蔵）

【資料】小山内薫『反古』（明治43・9「新思潮」、発売禁止）

月に二度位、私はその雑誌の整理をするのです。『少年世界』は『少年世界』、『小国民』は『小国民』、『少年園』は『少年園』と一々別に揃へて、号数を合せるのです。そして製本屋に遣る分は、巾の広い紙で帯封をして背に入れる文字をその帯封の上を書くのです。

作家が読者による合本を想定して本を出版する場合もある。

【資料】有島武郎『有島武郎著作集』第12輯『旅する心』（大正9）巻末の、『有島武郎著作集』広告

私の著作集を合本して下さる読者の便宜の為に小説と感想文と及び今後引続き発表すべき紀行、戯曲等各装幀も頁数も区別して置きます。而して二冊若しくは三冊毎に合本が出来るやうに一卷分の扉及目次を添附することとします。……………著者

雑誌をリアルタイムで購入していた図書館などでは、図書館による合本製本のほかにこうした例を見ることは少ないが、個人蔵の場合には合本の例は多い。

このうち、いわゆる洋装（紙くるみ装）の雑誌を和装本のように四ツ目綴じに綴じ直す場合もある。



・「都の花」合本（20号～28号、二冊）

「都の花」はもと紙くるみ装だが、背を裁ち切った上で上掲写真のように綴じ直してある。使ってみるとわかることだが、紙くるみ装平綴じの雑誌をハードカバー-製本すると、えてして開きにくく、針金や糸をとって「和装」にした方がかえって使いやすい。

このタイプの製本をしばしば見かけるのは、夏目漱石や芥川龍之介の作品が載った「帝国文学」である。



・「帝国文学」合本のさまざま。
もとは紙くるみ装。





永井荷風『狐』などが載った「中学世界」では、読者が四ツ目綴りに綴じた本のほか、ハードカバーに綴じた本もある。ただしハードカバーの方は明治文学研究草創期の研究者として知られる木村毅の旧蔵本であり、戦後の製本である可能性もある。

販売段階において洋装活字本的一种とみえる雑誌は、「洋装」の「雑誌」として流通・残存していたとはかぎらない。さらに文学に関していえば、雑誌のなかの小説（気に入った作）だけを切り抜いて綴じあわせる合本も、それなりに広く行われたようである。



・「寒」「杉葉の社」「碧燈集」「小説集IV」「現代短篇 小説一百集」「中央公論小説集」。いずれも同時代の雑誌から小説をとって再製本したもの。

小問 2 国文学研究資料館の国書データベースで雑誌「珍笑新誌」を検索し、各巻の情報を、先の採録基準を参考に採録してみてください。

<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio?ln=ja>

小問 3 早稲田大学の古典籍総合データベースのうち、「新聞 書簡」でヒットする資料群から一つを選んで読み、新聞と文学者の関係を読みとってみてください。

<https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/search.php>

三、単行本

雑誌・新聞に掲載された文章をまとめる形、あるいは直接「書き下ろし」の形で、単行本に文章が載る。はじめて作品が収録された単行本を「初刊本」「初収録本」と呼ぶ。著者の文集が初の単行本収録であるとはかぎらず、たとえば『舞姫』の場合は雑誌「国民之友」掲載後、同誌掲載作を集めたアンソロジー『国民小説』に収められ、その後鷗外自身の単著『水沫集』（明治 25）に収録された。

■単行本を扱うにあたって採取すべき情報は次の通り。

○形態情報

・サイズ、和装／洋装の別、外装・つきものの有無（袋／カバー／函／帯／リーフレット／はがき）

○奥付情報

発行年月日、版数、発行者（出版舎）、印刷所、価格

※国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」の採録情報のうち、必要な箇所を取りあげ、外装の情報を付加した。

★奥付の読みかた

明治本の奥付表記については、本古典籍講習会の 2018 年度テキストとして書かれた、谷川恵一「近代文献について―奥付の読み方」を参照。現在のところ、これを超える詳細な参考文献はないので、ぜひご一読をおすすめしたい。

https://kokubunken.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3882&item_no=1&page_id=13&block_id=21

明治 26 年の出版法公布あたりを境として、奥付に記載される事項は和装本／洋装本の別をこえて均質化しはじめる。印刷年月日、発行年月日、版数（初版の場合は記載されない）、定価、著者／編者、発行者、発売所、印刷者、印刷所、そして検印。

傍線を引いた箇所は、図書館・文学館・博物館で近代本を引き受ける際に採録していただと、研究の進展に役立つ情報である。

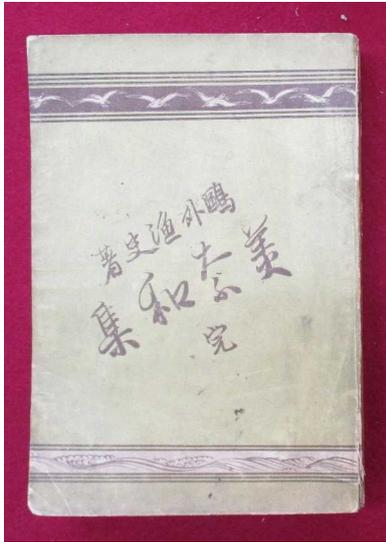
谷川氏稿が示唆する通り、近代には江戸時代以前にない「重版」という出版形態が存在する。版数が記された奥付は、重版について知るためにもっとも有用な手がかりの一つなのだが、困ったことにしばしば読者をまどわせることがある。しかしこの信用おきがたい手がかりと腰を据えてつきあっていくことで、重版、そして改版という現象が、近代出版の近代性を考えるための重要な指標として見えてくるだろう。

★重版について

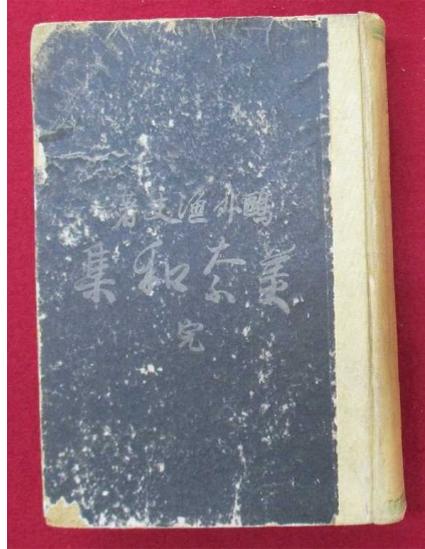
たとえば『水沫集』の場合、「初版」と呼ばれるのは明治 25 年に出版された紙くるみ装

の本である。しかしこの「初版」と全く同じ日付でボール表紙・背クローズの、背に「美奈和集 再版」と書かれた本が存在する。こちらのハードカバーの本の表紙は、黒と緑色の二種類がある。

さらに明治 27 年に出た、今度は奥付に「再版」、扉に「第貳版」と書かれた「再版」本がある。再版 B の装幀はほぼ再版 A と同じ。



・ 初版（明治 25・7・2）



・ 初版と同日発行の「再版」（再版 A）



・ 明治 27・1・5 発行の「第貳版」



・左から、初版、初版と同日（明 25）再版 1 冊、明治 27 再版 2 冊。（最も右は改装本）

こうした出版が行われた理由や背景は今のところ明確ではなく、類似の事例を一つ一つ探っていくほかない。明治 10 年代は和装本といわゆる「ボール表紙本」がせめぎあう時代であり、はじめ和装四つ目綴じで出ていた本が再版でボール表紙で出版される例としては『万法精理』や『英和通信』（明治 16 年に和装四冊で出版、明治 20 年に洋装一冊で出版）、そして坪内逍遙『当世書生気質』などがある。宮内省蔵版・吉川半七発行の『婦女鑑』のように、明治 20 年の和装本出版ののち明治 38 年に突如としてハードカバーが出る本もあり、和装本からハードカバーへと本の形が移行していく、その一過程として『水沫集』をとらえることもできるかもしれない。しかし和装袋綴じ複数冊を洋装袋綴じ一冊に綴じかえる（あるいは『書生気質』のように、袋綴じを単葉綴じにする）というこれらの変更と、紙くるみ装一冊をハードカバー一冊に変更した『水沫集』の場合はやや異なるようだ。やや近いのは『西国立志編』で、この本はかなり近い時期に、ハードカバー（数種存す）と紙くるみ装が両方とも出版された（ただし版元は別）。

たとえばここから、ハードカバーの装本を「洋装」ととらえる一方で紙くるみ装を「和風」、つまり和本の流れをくむ「古い」装本のように見る視線を、解きほぐすことができるだろう。先述の通り、明治 10 年代にはボール表紙をつけた活字本が「洋装本」のスタイルとして定着しつつあったのだが、実は明治 20 年代後半に文学書などで多数を占める「洋装本」は紙くるみ装のスタイルであり、その動向を博文館とともに牽引したのが『水沫集』を出した春陽堂だった。和本ではなく、しかし荘重さを演出するボール表紙本よりも簡単に手にとることのできる紙くるみ装平綴じのスタイルは、博文館の「日本大家論集」あたりから、（『舞姫』の載った「国民之友」もふくめて）明治 20 年代前半の雑誌に一斉に採用されていく。もちろん前述の通り、再製本の際にはハードカバーになったり四つ目綴じになったりするのだから紙くるみ装がトレンドの最先端だったとばかりも言えないのだが、『水沫集』は再版になって「洋風」の装本に変容したというより、紙くるみ装平綴じの装本をこそ「初版」とすることで、斬新さを積極的に演出したと見ることもできる。

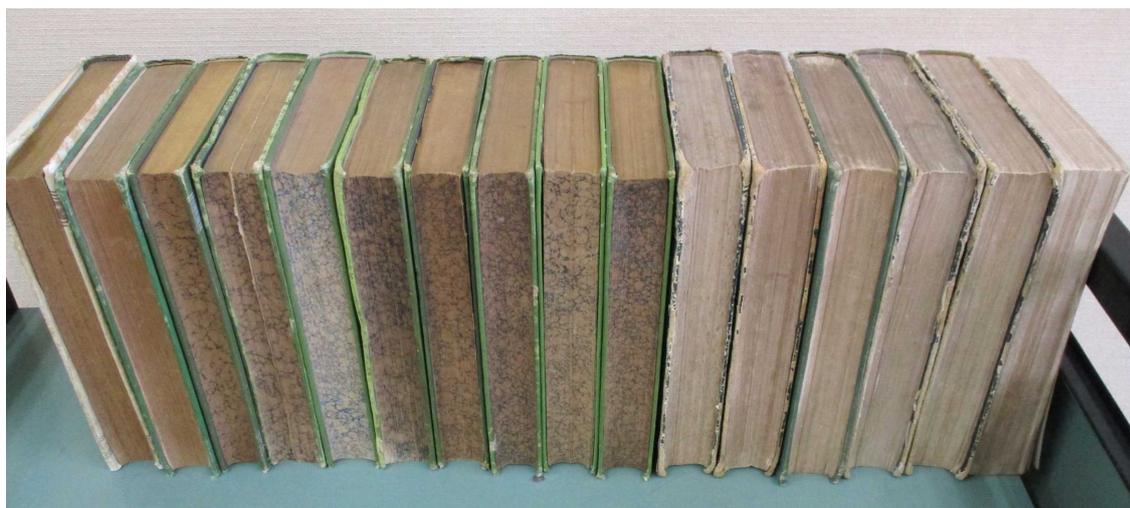
★本の「形」と商品としてのステイタス

近代本の「重版」はそれぞれ別の本であると認識しておいた方が、書物の流れをとらえてゆくにあっては勝手のよいことが多い。

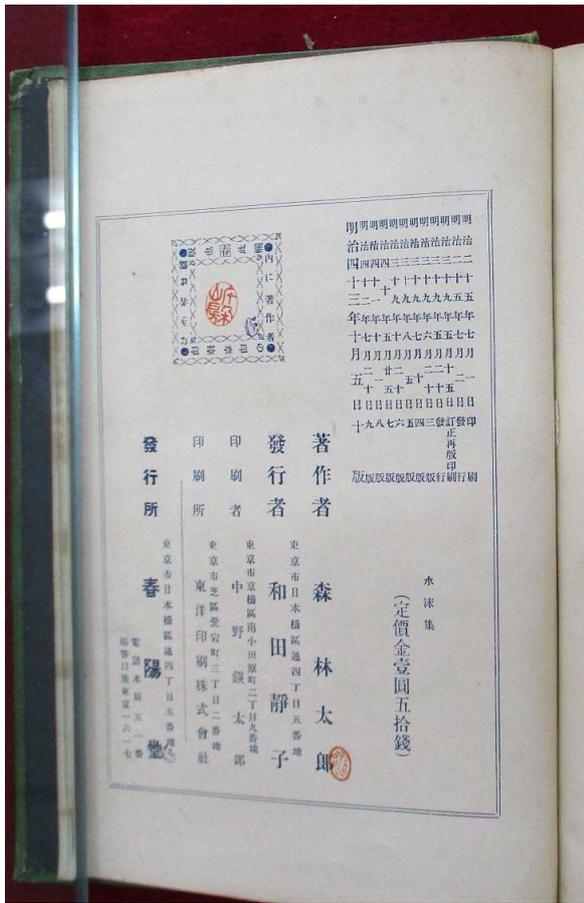
明治 39 年に「改訂再版」が出て以降 10 版まで同じ形の本が出続けているように見える『改訂水沫集』も、よくよく見るといろんなところが異なっている。



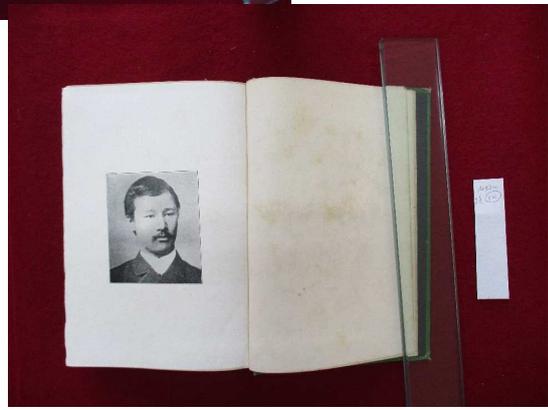
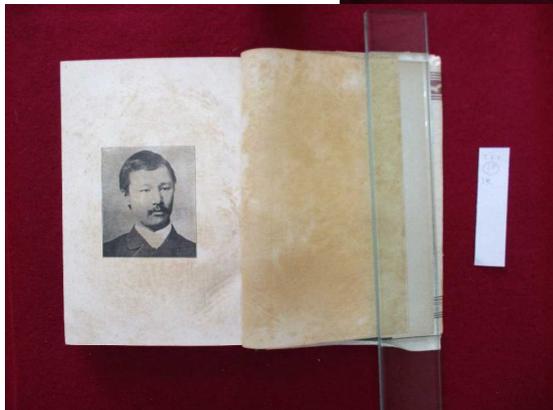
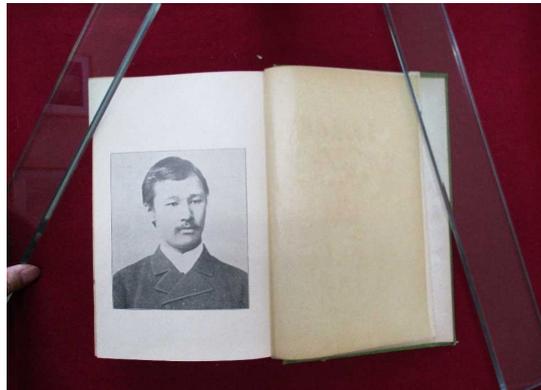
- ・『水沫集』初版から縮刷 9 版、縮刷異装版



- ・マーブル模様は改訂初～8 版まで。10 版二種類ではいずれも消える。



・「十版」二種類。別々の印刷所が別日に「十版」を刷っている。



・8版（上）と10版二種類。鷗外が小さくなる。
 ・写真と目次、序の綴じる順序が異なる版もある



・じっと目を
凝らしてご覧
ください

★近代本の「残りかた」と「残しかた」

縮刷本『水沫集』各版にも天金や著者情報などさまざまな違いがあるが略す。以後、文庫本、作家全集をはじめとする文学全集、翻訳、アンソロジー、名文集、教科書、受験参考書など、さまざまな形で作品は再録されつづけていく。

一つの文章が本から本へとわたりあるいは転写あるいは変形の連鎖と、それぞれの本が残存しつづけてしまう滞留あるいは持続の相にこそ、日本近代における本と文学の根本的な関係構造を見ることができるだろう。

鷗外自身がこうした書物環境の変化に非常に敏感であったことは、『改訂水沫集』の序文に見える。いま目の前にある本は、本という入れ物の変化に応じて、また姿を変えるかもしれない——文学者たちのこうした予感、彼らを書いて作り出していった「文学」の形を考えるための手がかりとなるはずである。

【資料】「改訂水沫集序」（明治 39・5・20『改訂水沫集』）

されば改むべきをも悉くはえ改めず。断つべきを断たざるあり。続くべきを続がざるあり。ひたすら行数を増減せんことをのみ恐れつ。〔略〕今全く破り棄てまほしきものさへ交りたる旧藁に、襤褸を補綴するにも譬へつべき加筆する我は、まことに憫むべきかな。

参考文献

【自筆資料】

- ・青木正美『自筆本蒐集狂の回想』（1993、青木文庫）
 - ・松澤和宏『生成論の探究——テキスト・草稿・エクリチュール』（2003、名古屋大学出版会）
 - ・日本近代文学館『近代文学草稿・原稿研究事典』（2015、八木書店）
 - ・日本近代文学館『小説は書き直される—創作のバックヤード』（2018、秀明大学出版会）
- ※ほか、宗像和重氏、戸松泉氏、十重田裕一氏、渡部麻実氏による一連の原稿研究も重要。

【雑誌・新聞】

- ・前田愛『近代読者の成立』（原著 1973、有精堂。2001、岩波現代文庫）
- ・『雑誌探索』（1992、朝日書林）をはじめとする、紅野敏郎の著書
- ・永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（1997、日本エディタースクール出版部）
- ・山本武利編『新聞・雑誌・出版』（2005、ミネルヴァ書房）
- ・坂口博『校書掃塵—坂口博の仕事 I』（2016、花書院）

【単行本】

- ・川島幸希『初版本講義』（2002、日本古書通信社）
- ・国文学研究資料館編『明治の出版文化』（2002、臨川書店）
- ・谷川恵一『歴史の文体 小説のすがた』（2008、平凡社）
- ・浅岡邦雄『“著者”の出版史—権利と報酬をめぐる近代』（2009、森話社）
- ・多田蔵人「水沫集の重版を読む」（2016・6～8、「日本古書通信」）